

浄土往生ということ

中央仏教学院講師 玉木興慈



法然上人の『選択本願念仏集』（『選択集』）のいわゆる「三選の文」（『註釈版聖典七祖篇』1285頁）には、「それすみやかに生死を離れんと欲はば、二種の勝法のなかに、しばらく聖道門さしおを闊あき選んで浄土門に入るべし」というご文があります。三選の第一にあたる文ですが、次のような内容をあらわしていることができます。速やかに迷いの境界を離れようとするならば、二種類の優れた教法があります。その教法とは、聖道門と浄土門ですが、聖道門をさしおいて、浄土門を選んで入りなさいということです。

この文を親鸞聖人は、主著『顕浄土真実教行証文類』（『教行信証』）（『註釈版聖典』185頁）と『尊号真像銘文』（同665頁）に引用されています。法然上人から「浄土門を選びなさい」という教えを賜ったということです。親鸞聖人は聖道門・浄土門について、それぞれ「この界のうちににつしめして入聖得果とくかするを聖道門と名づく」「安養淨刹あんにようじよせつにして入聖証果するを浄土門と名づく」（同394頁）と記されています。聖道門とは、この世で聖者となって悟りを得る道であり、浄土門とは、浄土に往生して悟りを開く道ということです。親鸞聖人が明らかにされた仏教は、「浄土に往生して悟りを開く道」ということができるのです。

龍谷大学名誉教授岡亮二氏「親鸞にみる往生浄土の思想」（『親鸞の念仏』161頁）によれば、親鸞聖人の浄土往生について論じる場合、大きく次の4点に論を絞ることができます。

- 1 いかなる行によって浄土に往生するか。
- 2 その往生はいつ決定するか。
- 3 生まれるべき浄土とはいかなる場か。
- 4 往生した衆生はそこでいかなる仏道をなすか。

4点全てについて論じる紙数がありませんので、ここでは、第1と第3の点について、親鸞聖人のお書物によりながら、愚見を述べさせていただきます。

きたく思います。

二

まず「いかなる行によって浄土に往生するか」という点ですが、親鸞聖人は浄土往生のための行について、どのような理解を示されているのでしょうか。先に触れたように、『選択集』「三選の文」が『教行信証』に引文されますが、この引文に続いて、「これ凡聖自力の行にあらず。ゆゑに不回向の行と名づくるなり」という御自釈を記されます。浄土に往生するための行は自力の行ではなく、それゆゑ不回向の行であると示されるのです。

親鸞聖人はどのような行を「自力の行」と考えられたのでしょうか。また「不回向の行」とはどのような行のとらえ方をしておられるのでしょうか。親鸞聖人の浄土往生を理解するためには、この点について理解を深めなければなりません。

また、「生まれるべき浄土とはいかなる場か」という点について、親鸞聖人のお示しをうかがうとすれば、『教行信証』の「真仏土巻」「化身土巻」にどのように浄土が示されるのを見なければなりません。「真仏土巻」は真実を顕す巻であり、「化身土巻」は方便を顕す巻ですが、「真仏土巻」「化身土巻」の冒頭の文は、それぞれ「つつしんで真仏土を案ずれば、仏はすなはちこれ不可思議光如来なり、土はまたこれ無量光明土なり」（同337頁）、「化身土を顕さば、仏は『無量寿仏観経』の説のごとし、真身観の仏これなり。土は『観経』の浄土これなり」（同375頁）という文です。つまり「真仏土巻」によれば、真実の仏はおもいはかることのできない不可思議光如来であり、真実の浄土は限りない光明の世界であるということです。また「化身土巻」によれば、方便の仏は『観経』に説かれる真身観の仏であり、方便の浄土は『観経』に説かれる浄土であると示されるのです。

両者、つまり「いかなる行によって浄土に往生するか」「生まれるべき浄土とはいかなる場か」という点を併せて表現すれば、浄土往生について、自力の行によれば『観経』に説かれる方便の浄土に往生し、不回向の行によれば真実の浄土に往生する、ということになります。

では、方便の浄土に往生する自力の行とはいかなる行をいうのでしょうか。「信罪福」という語に注目してみたいと思います。この語は、『教行信証』においては、「化身土巻」の要門・真門を明かす箇所(同378頁、399頁、400頁)で用いられています。

要門とは、『観経』に説かれる定善散善を修することによって浄土往生を願う仏道をいいます。慮おぼやかしを怠めて心こころを静かにし、一つのものに思いを凝らすこと、具体的には阿弥陀仏の浄土を見るということが定善であり、定善の行をなすことのできないものが悪い行いを止めて善い行いをする、これを散善といいます。『観経』に説かれる教えとは、これらの行法を完成させることによって浄土往生を果たすということでしょう。

また真門とは、阿弥陀仏より回向された弥陀の名号を自身の善根とし、己れの積む功德として浄土に回向することによって、往生浄土を願うという衆生の姿をいいます。

要門・真門の各々の行者が修する行は、息慮凝心・廃悪修善・称名念仏と異なりはしますが、いずれも行者が自身に何らかの行を課し、その行を満たすことによって浄土往生という果を得るということです。この行者の心が「信罪福心」であるということが出来ます。

すなわち、信罪福心とは、信罪心・信福心という二つの心です。信罪心とは罪を信じる心ですが、これは自らが罪をなせば、その罪に牽かれて真実浄土に往生することができないと信じる心であり、自らのなした(なす)罪という因によって、真実浄土に往生することができないという果が生じると信じる心を信罪心といいます。逆に信福心とは福を信じる心を行い、自らが福をなすことを因として、真実浄土に往生できるという果が生じると信じる心を行います。

このような心について、親鸞聖人は、お手紙では「わが身のわるければ、いかでか如来迎へたまはんとおもふべからず・・・またわがこころよければ往生すべしとおもふべからず、自力の御はからひにては真実の報土へ生るべからざるなり」(同747頁)と記しておられます。自分が悪人であるからといってどうして阿弥陀如来が迎えに来てくださるのか、迎えに来てくださらな

いのではないかと、思ってはならないのです。また、自分の心が良いから真実の浄土へ往生できる、と思ってはならないと諭されるのです。自分の身(心)の善し悪しによって浄土往生の可否が決定されると思ってはならないということです。この信罪福心を『正像末和讃』では、次のように詠われます。

自力諸善のひとはみな 仏智の不思議をうたがへば
自業自得の道理にて 七宝しつぽうの獄にぞいりにける (同611頁)

自業自得とは、辞書によれば「自らつくった善悪の業の報いを自分自身で受けること。一般に、悪い報いを受けることにいう。自業自縛」と説明されています(『広辞苑 第五版』1157頁)。この自業自得の考えが、仏智不思議を疑うことであると受け取ることができるでしょう。

では、方便の浄土とはどのような浄土をいうのでしょうか。先にも触れた「化身土巻」冒頭の御自釈によれば、『仏説観無量寿経』に説かれる定善十三観の第九観の真身観や九品往生に説かれる浄土が、方便の浄土と記されています。すなわち「仏身の高さ」「眉間の白毫」などの、無量寿仏の身相と光明をもって示される仏・浄土をいいます。また、「化身土巻」では、『仏説無量寿経』から道場樹・講堂・宝池莊嚴の文が引かれています。道場樹の「高さ」、講堂・精舎・宮殿・楼観の七宝莊嚴などが説かれるのです。これらの有相的・有量的表現で捉えられる仏・浄土を、親鸞聖人は方便の仏・浄土とされているのです。

四

先に述べたように、「自力の行」によれば方便の浄土に往生すると説かれていますが、「不回向の行」によって、真実の浄土に往生するといわれます。すなわち、「いづれの行もおよびがたき身」と信知される身においては、往生浄土のために回向する、いかなる行もなしえないということであり、それゆえ『歎異抄』第八条には「行者のために非行・非善なり」(『註釈版聖典』836頁)と記されるのです。先に挙げたお手紙では、「よきあしき人をきらはず、煩惱のこころをえらばず、へだてずして、往生はかならずするなりとするべしとなり」と述べておられます。行者が良いから往生させよう、行者が悪いから往生させないということではなく、善人も悪人も区別せず、煩惱の心を分け隔てせずに攝取不捨するという、阿弥陀仏の本願の

心を受けとめられるのです。

阿弥陀仏の本願のお心を受けとめる念仏者が、信の一念に「仏になるべき身に定まる」という正定聚に住すると示され、「信心の行者」「染香人」「妙好人」「真仏弟子」などとあらわされます。信心の念仏者は「如来とひとし」「弥勒に同じ」などの讃辞をもって記されるのです。このように様々な言葉で称讃される真実信心の行人について、お手紙を拝読すると次のような文言を見ることができます。

来迎は諸行往生にあり、自力の行者なるがゆゑに。臨終といふことは、諸行往生のひとにいふべし、いまだ真実の信心をえざるがゆゑなり。
…真実信心の行人は、攝取不捨のゆゑに正定聚の位に住す。このゆゑに臨終まつことなし、来迎たのむことなし。信心の定まるとき往生また定まるなり。
(同735頁)

諸々の善行を積んで浄土往生を願うような行者は、前節で記したような真実信心を得ていない自力の行者とされます。このような行者は、臨終まで往生が決定しないために、臨終の一念まで心が定まらず落ち着かない動揺した心のままであるといわれ、それゆゑこのものは臨終の来迎を期待することになります。逆に言うならば、臨終の来迎がなければ往生がかなわないということでもあるのです。

しかし真実信心の行者は、阿弥陀仏の攝取不捨の救いを信知したものであり、正定聚の位に住しているものをいうのです。阿弥陀仏の救いをその如く信知するものは、その信一念に往生も定まるために、臨終や来迎を待つことはないと示されるのです。

また別のお手紙には(同803頁)、「信心まことにならせたまひて候ふひと」(真実信心の行者)は、誓願の利益で往生がすでに定まっていることが明らかにわかっているのであるから、臨終の来迎を期待する必要はないのでありと諭しておられます。同時に、いまだ信心が決定していないものは、臨終を待つことも良いだろうとも記されています。

このように親鸞聖人の現生正定聚は、阿弥陀仏の攝取不捨の救いとともて語られるのです。現生に正定聚に住する獲信の念仏者は、阿弥陀仏の本願を聞いて疑心あることのない聞即信が成立するとき、すでに救われていたと信知するのです。それゆゑ臨終を待つことなく来迎をたのむ必要もな

いというのです。

しかし、『教行信証』「信巻」に「臨終一念の夕、大般涅槃を^{だいぱんねはん}超証す」(同264頁)、『一念多念文意』に「凡夫といふは、無明煩惱われらが身にみちみちて、欲もおほく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころおほくひまなくして、臨終の一念にいたるまで、とどまらず、きえず、たえず」(同693頁)と記されるように、臨終の一念まで往生成仏ということは仰らないのです。

現生において正定聚に住する念仏者は、往生が定まるということをお聖教に聞いてきました。この正定聚の念仏者にとって、浄土とはどのような世界なのでしょう。初めに記したように『教行信証』「真仏土巻」では、「無量光明土」と記されています。光明が無量であるということです。無量と示される光明は、何ものにも^{さまたげ}碍られることがないということであり、あらゆる諸仏の国を照らすということでもあります。

「真仏土巻」を拝読させていただくと、次のような表現に出あいます。

阿弥陀仏の光明と名とは、八方上下無窮無極無央数の諸仏の国に聞か
しめたまふ…聞知せんもの、度脱せざるはなきなり (同341頁)
見に二種あり。一つには眼見、二つには聞見なり…菩薩、もし一切衆
生ことごとく仏性ありと聞けども、心に信を生ぜざれば、聞見と名づ
けず (同356頁)

「真仏土巻」に記される浄土は光明で表現されますが、光明・浄土・如来を「聞く」と表現されていることに注目したいと思います。このことは、『教行信証』「信巻」の真仏弟子釈に『仏説無量寿経』第33願触光柔軟の願が引かれ、「十方無量不可思議の諸仏世界の衆生の類、わが光明を蒙りてその身に触るるもの、身心柔軟にして人天に超過せん」(同257頁)と述べられることも併せて考えるなら、浄土とは、煩惱成就という迷いの衆生の世界を照らす真実清浄な光明の世界であると受けとめることができるのです。

つまり、本願を信知した念仏者は正定聚に住し、無量光明土と示される真実浄土の光明を聞くことができるということです。阿弥陀仏の大悲の光明に攝取されているという我が身は、どこまでも煩惱成就の凡夫であると知らされつつ、「往生定まる」「仏になることが定まる」と聞信・信知・聞知するということなのです。親鸞聖人の浄土往生ということについて、以上のようにうかがいたいと思います。(龍谷大学助教授：真宗学)